

茅風



Breeze from the field of thatch-grass

2019年1月25日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信56号



茅出しの朝、上ノ原から上毛の山々を望む

- 9月後半～12月の活動報告(事務局).....1
- 2018 定例活動⑥.....2
「赤谷プロジェクト訪問」
◆開催報告(草野 洋)
- 2018 定例活動⑦.....3
「茅刈りとポッチづくり」
◆開催報告(草野 洋)
- 茅刈り古民家合宿.....4
◆開催報告(草野 洋)
- 麗澤中学校「奥利根水源の森フィールドワーク」.....5
◆開催報告(草野 洋)
- 2018 定例活動⑧.....7
「茅出し・十日夜・山の口終い」
◆開催報告(草野洋)
- 藤原現地報告(北山 郁人).....8
「復活から6回目を迎えた十日夜」
- リレー投稿・第一回.....9
「団地住まい」(川端 英雄)
- 野守のつぶやき(清水 英毅).....10

編集後記 (敬称略)

【9月(続き)】

- 22、23日 会員限定で「赤谷プロジェクト」を訪問。12名参加。ふれあい推進センター森内所長の案内で、普段は入れない林道の奥まで視察。宿泊施設として再利用されている旧猿ヶ京小学校やたくみの里なども見学。

【10月】

- 5日 上ノ原の生態系観察のため北山会頭立ち合いのもと日本自然保護協会によりフィールド内に温湿度ロガーを設置する。併せて、田んぼの周辺で簡単な植生調査を実施。
※10月の茅刈時には、地温計を設置。
- 20、21日 定例活動「茅刈り」。24名(うち地元日帰り4名)参加。88ポッチ刈り取り、直売所ではポッチ券83枚(16600円相当)が利用される。
- 20日 茅刈時の車座講座にて、藤岡和子会員がネパールエコツアーの報告。続いて、日本自然保護協会の朱宮氏が、上ノ原に設置したセンサーの映像を紹介。クマ、イノシシ、キツネ、シカなどが撮影されていた。
- 20日 みなかみ町エコパーク推進課高田課長より、文部科学省の「ふるさと文化財の村」の候補として上ノ原を申請するとの報告あり。
- 21～23日 「茅刈り合宿」5名が古民家に泊まり込んで茅刈りを継続。84ポッチの成果。

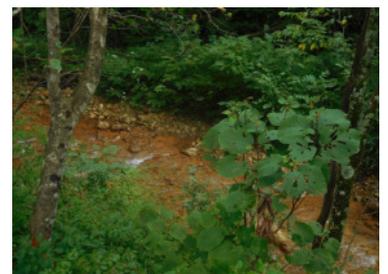
茅刈りにあわせて種苗業者が来訪し、ススキのタネを崖などの法面補強・緑化に使えないか検討。

- 24日 麗澤フィールドワーク(FW)実施。4クラス(グループ)8班ごとに体験活動。主なメニューは ①茅刈②森林草原観察③草原であそぼう④雲越家住宅見学。インストラクター17名で対応。

【11月】

- 17～18日 定例活動「茅出し」。9名参加 686ポッチ搬出する(内訳 ボランティア88 茅刈合宿84 地元茅刈衆514)。
ほかに「たかね」仁三郎さん指導のもと、椎茸などのコマ打ち実施。
- 今年の茅刈り数が確定し、町田工業から76,800円入金。内訳は、合宿刈り分50,400円(参加者に還元)、ボランティア分26,400円(塾の地域通貨勘定に入り、来年の地域通貨の原資になる。)

写真は9月の赤谷プロジェクト視察で訪れた赤谷川。上流では鉄分が融け赤くなっているのが名前の由来。



(以上)

■2018定例活動⑥

「赤谷プロジェクト訪問—深い森の中の 壮大な実験—」 報告 草野 洋

今年度の新たな取り組みとして、会員がいつものフィールドの外で自然環境保全活動を体験する場を作ること企画しました。第1回目の玉原は宿泊の都合で実現しませんでした。今回は、同じみなかみ町で、大規模に生物多様性の復元に取り組んでいる全国的に知名度の高い赤谷プロジェクトを訪ねました。

「赤谷プロジェクト」とは、群馬県みなかみ町北部、新潟県との県境に広がる、約1万ヘクタール(10km四方)の国有林「赤谷の森」を、地域住民で組織する「赤谷プロジェクト地域協議会」、(財)日本自然保護協会、林野庁関東森林管理局の3つのセクターが中核団体となって、協働して生物多様性の復元と持続的な地域づくりを進める取り組みのことです。プロジェクトの正式な名称は「三国山地赤谷生物多様性復元計画」。その名の通り、生物多様性復元のための意欲的で大規模なプロジェクトです。

ここでは、最近、人工林を伐採してイヌワシの餌場確保する意欲的なプロジェクトを行っていることで話題となっています。上ノ原で茅場の保全を通じた生物多様性保全に取り組む当塾とは規模も学術的要素も桁違いのプロジェクトですが、同じみなかみ町で取り組む大先輩プロジェクトを訪問して、生物多様性保全活動の神髄を学び、確かめようとの企画で、みなかみ町役場の小林さんのご尽力により実現しました。

今回の研修視察には12名が参加。9月22日は幸いに天候にも恵まれ、みなかみ町旧新治村の猿ヶ京温泉の少し上流にあるプロジェクトのフィールドステーション「いきもの村」に着いたときは汗ばむほどでした。このステーションは旧苗畑の休憩小屋を再利用したもので、私にとっては懐かしい現場のにおいのする施設です。思わず50年前にタイムスリップしてしまいました。



森内所長の説明を真剣に聴く



ここで、休日にもかかわらず出勤いただいた赤谷森林ふれあい推進センターの森内所長に赤谷プロジェクトの発足の経緯、体制、事業内容について説明いただきました。各種の課題と目的、これまでの成果が的確にまとめられ素人にもわかりやすいものでした。

中でも「イヌワシ狩場創出試験」はこれまでにない意欲的な取り組みです。人工

林の皆伐によりイヌワシが狩りをする場所を確保するというもので、子育ても10年ぶりに2年連続で成功しているとのこと。伐採から3年ですが、植生の回復状況もモニタリングされており、森林の自然再生という観点からも興味深いものでした。閉鎖的になったスギ人工林を皆伐して自然植生を増やし、野ウサギなどの小動物の餌場や生息環境を改善し、それがイヌワシの餌場、生息環境の改善につながる食物連鎖の再創出です。これは植生、鳥類などの各分野の専門家との協働による科学的知見に基づく取り組みです。これが継続され、各地に応用されれば、食物連鎖の頂点にあるイヌワシも含めた生物多様性の保全に貢献することでしょう。

考えてみると、林業が盛んな頃はこのような皆伐地が適当にあって餌場も確保されていたのでしょうか。この試験は、林業再生の取り組みでもあるとも感じました(もちろん計画的で適正な施業が前提ですが)。

そのあと、森内所長の案内で、「囲い罠」を見せてもらいました。鉾塩で慣れさせたシカを柵の中に誘い込むという手法でシカを集団でとらえ頭数調整を行うものです。増えつつあるシカから森林や下層植生を守るのが目的ですが、生物多様性保全とは生物をただ守ればいいというものでなく、時にはこのような駆除も必要なのです。

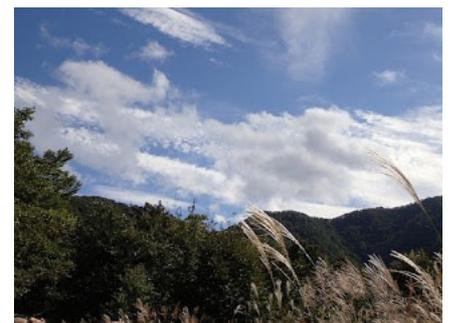


シカを誘い込む囲い罠

この後、一行は川古温泉を通過して三国山地の赤谷川の奥へと分け入りました。そこではイヌワシ狩場創出試験の伐採跡地を見せてもらい、植生の回復状態を実際に確認できました。

二次林や人工林だけでなく豊かな自然林もある、少し恐怖も覚えるような深い森林に入ることは、ほとんどの参加者にとって初めての経験です。

そこで行われている数々の取り組みを知り、赤谷の森の豊かさを実感し、このプロジェクトが関係者の努力で期待どおりの成果が上がるであろうと確信しました。



奥深い赤谷の山々



狩場創出試験地の植生回復状況



この日の宿は猿ヶ京温泉の農家民宿「はしば」。とても良い雰囲気であけ流し温泉を満喫しました。

2日目は、与謝野晶子紀行文学館など猿ヶ京の見どころを見学。与謝野晶子はこの地を何度も旅していますが、気品のある館長さんから敬愛と情熱を感じる解説を伺い、文学の世界に浸りました。その後、木造の旧猿ヶ京小学校(現在は宿泊施設として利用)や「たくみの里」を視察して今回の行程を終えました。



左上 赤谷の森で見つけたマタタビの実
右上 旧猿ヶ京小学校の庭で見つけたヤマボウシ
左 小学校の庭で野点

■2018定例活動⑦ 「茅刈りと茅ポッチづくり」 報告 草野 洋

10月も中旬に入ったが藤原・上ノ原にはまだ初霜がない。やはり季節がおくれているようで紅葉もまだこれからである。だが秋の日は移ろいが早く、一日一日と変わっていく。今回は藤原に20日から24日まで逗留したが、22日に初霜があり、紅葉は日ごとに赤や黄色が増えて、24日には見頃を迎えた。こうして日々移り変わる紅葉が見られたのも滞在したおかげである。



今年の茅刈りは、20日、21日に参加者24人、地元指導者などを含めると30人が上ノ原で鎌を振った。うれしいことに、みなかみ役場広報の効果もあって地元から4人が日帰り参加、そして2日目には藤原森の幼稚園「でこでこでん」の園児たちも上ノ原茅場に遊びに来てくれて、ススキ草原は子供たちの歓声や泣き声で賑わった(写真・左下)。

飲水思源地域通貨ポッチ券。200ポッチは200円相当。下は裏側の説明書き。地元の直売所で藤原の農産物などを購入できる。



今年の茅刈りは茅束の生産量の確保のためひと工夫している。

これまで村の古老達のご尽力で相当数の茅束をポッチにして、茅場から持ち出し、生物多様性が保たれてきたが、昨年からの搬出量が少なくなっており、それを何とかカバーするべく、昨年に続いて刈ったポッチ数に応じて「飲水思源地域通貨」を発行した。

また、村の古老に変わりボランティアのチカラを発揮すべく、定例活動終了後も一部の会員が居残り、古民家に合宿して茅を刈った(その様子は4・5頁に掲載)。

参加者は曇り空の中、始まりの式、鎌研ぎに続いて、雲越萬枝さんの指導で、抱え刈り、束の大きさ、束の結束の仕方、ポッチの立て方、ポッチの結束などを学ぶ。「茅刈り講習」が終わりそれぞれで刈り始めると、茅場には鳥の声、風がススキを揺らす音、ススキを抱える音、鎌の音ばかり。結束が難しくため息は聞こえるが、話し声はほとんどない。一心不乱でみんな取り組んでいる。



左上・左下 雲越萬枝さんの指導を真剣に聞く

右下 後は一心不乱に茅を刈る





途中、笛を鳴らさないで休憩も忘れてしまうほど。ボッチが姿よく立つと気持ちが良い。そして茅場にはボッチが次々と立って行く。



この日の宿は、食事がおいしいと評判の「とんち」。夕食後は、会員の藤岡和子さんによる「ネパールムスタン トレッキング紀行記」のライドショーである。秘境の風景や過酷な自然の中

で明るく暮らすムスタンの人々の姿が、彼女のユニークな目線にとらえられていた。

2日目は天気も回復し、紅葉も少し進んだ中で茅刈りを続行。皆さんに作ったボッチ数を自己申告してもらい、ボッチ券を渡して集計したところ78ボッチとなった。それにスタッフ等のボッチ数を入れると90ボッチにはなっていないはず。茅出しの際には正確な数字がわかる。

汗の対価として得たボッチ券をもって立ち寄った藤原直売所は今年も大賑わいを呈したのももちろんである。「汗が農産物に変わり、おいしい土産となる」(写真・右)



この日、みなかみ町エコパーク推進課の高田課長から上ノ原茅場が文化庁が指定する「ふるさと文化財の森」の候補地になっているとの話があった。文化財建造物の保存のために必要な原材料を安定的に供給するための森などを設定するもので、指定されれば上ノ原の知名度も上がり、塾の活動も評価されることになりうれしい限りである。



■茅刈り古民家合宿 「5人で64ボッチの成果—カメムシと同居も囲炉裏料理に舌鼓—」 報告 草野 洋

前掲の茅刈りの活動報告にも書いたように、今年の茅刈り実績を上げる対策として茅刈り合宿を行った。会員の稲さん、松澤さん、尾島さん、藤岡和子さん、それに私の5人は、定例活動の茅刈りが終わり参加者が上ノ原を後にした21日(日)の午後から23日(火)の午前中まで、古民家に泊まりながら茅刈り・ボッチづくりを続けた(21日は藤岡貴司さんが夕方まで付き合ってくださいました)。

まずは、参加者を送った帰路、食料などを調達。食料品のほかトイレトペーパーなどの生活用品は旧水上町湯原のスーパーで求め、お米と野菜は地元の農産物直売所でボッチ券で調達した。

初日は、茅刈りを4時過ぎに終了して古民家へ行くと、先住者がいた。たくさんのカメムシである、部屋の掃除と並行して、カメムシを刺激しないように布団の中などから慎重に取り除く。しかし、すべてを取り除くことはできないので同居することにする。この日から見つけると「カメちゃん」と呼び掛けて、その場所からご遠慮いただくことが数えきれないくらい続いた。でもこのカメちゃん、行儀は良いようで人のそばには寄ってこない、寝ている布団や寝袋の中で見たことはない。

藤岡和子コック長、尾島副長の陣頭指揮で食事の支度。藤岡さんは手持ちの材料でユニークなメニューを手早く作る名人である。男性陣への指示も的確。男性陣は、炭火、ストーブの火おこし、盛り付けや後片付けを受け持つなどチームワークは抜群。

この古民家はお風呂が使えないのが難点であるが、一日目は「たかね」の温泉風呂、二日目は湯の小屋温泉の旧葉留日野山荘の温泉を利用させてもらった。

入浴後は、お楽しみの晩酌、疲れた体に缶ビールが沁みわたり、いろりを囲んで焼き物などを肴に話も弾み日本酒も進む。

この日は十三夜、月明かりが差し込む中で、やがて就寝の時間。

合宿は寝袋持参であり、備え付けの敷布団の上で寝袋に潜



煙の中でも楽しい晩餐

り込んだ。私は、最初、寝袋だけだったが持参の寝袋は50年前の年代物なので夜中に寒くなり、たまたまに上から掛け布団をかけた。

それもそのはず、あくる朝、初霜が降りていた。朝飯を済ませ、昼食は古民家でとることにして握り飯を用意する。握り飯がネズミに取られないようにして上ノ原へ。

■「奥利根水源の森フィールドワーク」

—麗澤中1年生が上ノ原の茅場で遊び、学ぶ—

報告 草野 洋

二日目は、一日中茅刈に集中できるので「稼ぎ時」である。ちなみに、合宿の費用は、個人負担がないように刈った茅の代金で支払う算段であり、できるだけ多くの茅ポッチをつくれれば臨時ボーナスもあるはずである。

初霜が降りたこの日は、まさに茅刈り日和である。昼頃には上ノ原のススキのタネを、山腹緑化の資材として利用できないか、友人の緑化技術者と種苗業者が訪れることになっている。

一日中刈っているとさすがに疲れる。体全体が痛くなり、何かするたびに「どっこいしょ」が出る。

友人の緑化技術者は頼んでおいたサンマとともに予定通り到着。私は茅刈りを一時中断して、上ノ原と周辺を案内した。そのあと、自分たちも刈ってみたいとの要望をうけて、二人に茅刈を指導。

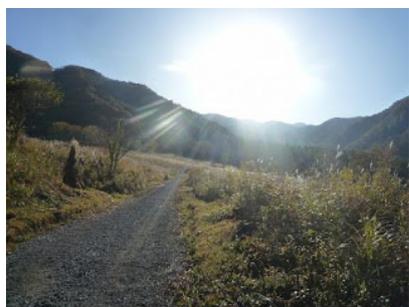


この日の食事のメインはサンマの塩焼き。それも囲炉裏での炭焼きである。(写真・左)このほか藤岡料理長の鮮やか手さばきでおいしい料理が並び、飛び入りの緑化技術者を入れての晚餐。炭火焼のサンマの味は最高で

お酒も進む。酒の効果で体の痛みも一時忘れて、この日も佳い月に見守られての就寝となった。

三日目は、麗澤中フィールドワークの下見・準備作業に7人ほどのインストラクターが上ノ原に集まる。そのため茅刈りは午前中のみで、宿も吉野屋となり、古民家合宿は今日で終わり。もっと続けたいかと問われれば、このくらいがちょうどよいと答えるだろう。

作ったポッチは全部で84であった。一緒に頑張ってくれた皆さん。お疲れ様、そしてカメちゃんお邪魔しました。



朝の光に輝く上ノ原



いい汗かいて、ポッチ群

この日に備え、前日入りした、日光、新潟、東京、神奈川、千葉から集まったインストラクターたちは、本番の下見と茅穂などの材料集めを行って受け入れに万全を期しています。

今年のプログラムは、クラスが5組から4組になったことや昨年の反省点を踏まえ修正して臨みました。主な修正点は、プログラム全体に時間的余裕を持たせるため、開始時間を若干早め、「森林・草原散策」「草原と遊ぼう」の時間配分を増やしました。

移動時間を少なくして、見学目的を以前の「暮らしと知恵、茅の使われ方」に絞ったため諏訪神社の見学は取りやめ、さらに昨年まで実施していた「茅編み」は事前の準備の負担軽減のため見送り、代わりに茅クラフト「茅ほうき」づくりを「草原で遊ぼう」に組み込みました。

メニューは、「森林・草原散策」、「茅刈体験」「草原で遊ぼう」「雲越家見学」の4つ。このうち昨年採用した「草原で遊ぼう」の内容は、「見えない森(目隠しトレイ



前日の作業 茅穂の採集と加工



草原で遊ぼうの説明を聞く生徒

森林・草原散策「ははその泉」で水源かん養の働きを実感「昨夜頂上に降った雨は皆さんが21歳になったところここに湧いてくる」



ル)「茅箒づくり」「茅飛ばし」「草原のハガキづくり」「きままに草原探索(特にメニュー化していないが)」を用意して生徒たちに自由に選ばせました。

「見えない森」は目隠しをしてあらかじめ張ったロープを伝わってゴールを目指すものでスリル満点。視覚に障碍のある方々の感覚も経験できます。「茅ほうきづくり」は、茅の穂を集めてミニチュア箒をつくります。最初は生徒たちに茅穂を集めさせる予定でしたが、前日に当日インストラクター達が採穂しました(写真・前頁)。

「草原のハガキづくり」は草原にある葉っぱや草花をハガキに張り、両親や友達にお便りして、みなかみのことを話題にしてもらう狙いがあります。

生徒たちは、クラスが2つのグループに分かれ、同じメニューをインストラクターの指導のもと行っていきます。

タイムスケジュールとプログラムの組み合わせは下表の通りです。学校側と当方の打ち合わせが不十分で上ノ原への到着時間がおくれたため、最初のクラスは森林・草原散策の時間を短縮しましたが、そのほかは天候に恵まれ、インストラクター達の機転もあっておおむね順調に進みました。

中にはやんちゃなクラスや私語に夢中なグループあってインストラクターから叱られることもありましたが、「未来からの留学生」である子供たちの貴重な体験のお手伝いをすることができました。インストラクターの皆様、先生方お疲れ様でした。プログラムや運営方法の不備や改善すべき点は、今年の実践を踏まえながら進化させていきたいと思えます。

麗澤中1年生奥利根フィールドワークプログラム&タイムスケジュール

日時 2018.10.23 16:10 場所 藤原湖
 日時 2018.10.24 終日 場所 群馬県みなかみ町藤原 上ノ原
 藤原ダムについて説明 林 親雄

時刻	Aクラス①②		時刻	Bクラス①②		時刻	Cクラス①②		時刻	Dクラス①②		
8:00			8:00			8:00			8:00			
8:30	集合 対面式	8:30~8:40	10	集合 対面式	8:30~8:40	10	集合 対面式	8:30~8:40	10	集合 対面式	8:30~8:40	10
	移動	8:40~9:00	20	移動	8:40~9:00	20	移動	8:40~9:00	20	移動	8:40~9:00	20
9:00	雲越家 住宅	9:00 ~ 9:40	40	森林 草原 観察	9:00 ~ 10:10	70	草原で 遊ぼう	9:00 ~ 10:10	70	茅刈 体験	9:00 ~ 10:00	60
	移動	~10:00	20							休憩	~10:10	10
10:00	茅刈 体験	10:00 ~ 11:00	60	草原で 遊ぼう	10:10 ~ 11:20	70	休憩	~10:30	20	森林 草原 観察	10:10 ~ 11:20	70
	休憩	~11:20	20				移動	10:50 ~ 11:30	40			
11:00	森林 草原 観察	11:20 ~ 12:30	70	茅刈 体験	11:20 ~ 12:20	60	雲越家 住宅	11:30 ~ 11:50	20	草原で 遊ぼう ①	11:20 ~ 11:50	30
	昼食	12:30 ~ 13:10	40	昼食	12:20 ~ 13:00	40	移動	11:50 ~ 12:30	40	昼食	11:50 ~ 12:30	40
13:00	草原で 遊ぼう	13:10 ~ 14:20	70	移動	~ 13:20		茅刈体験	12:30 ~ 13:30	60	草原で 遊ぼう ②	12:30 ~ 13:10	40
	移動	~14:40	20	雲越家 住宅	13:20 ~ 14:00	40				休憩	~ 13:30	20
14:00	ホテル 解散	14:40 15:00		休憩	~ 14:20	20	森林 草原 観察	13:30 ~ 14:40	70	移動	13:50 ~ 14:00	10
				移動	14:40 ~ 15:00	20	移動	~ 15:00	20	待機	~14:00	10
15:00				ホテル着 解散	14:40 15:00		ホテル着 解散	15:00 15:10		雲越家 住宅	14:00 ~ 14:40	40
										移動	~ 15:00	20
										ホテル着 解散	15:00 15:10	

メニューの説明

メニュー	内容	配置人数	インストラクター名
① 茅刈体験	ススキ草原で、茅葺き用の茅束を鎌で刈って束ねて、5束をポッチにして立てる作業。目標各グループ1ポッチ(5束) 鎌の安全な使い方、能率良く切れるきり方を体験して、自分たちが刈った茅の使われ方、草原の維持に茅刈りが大事なことを指導する。	4人	①北山 夏目 ②飯村 稲 湯澤
② 森林・草原観察	草原と森林内の歩道を歩き、草原が維持されることによる生物多様性保全、水源涵養、地球温暖化防止など森林の機能、森林土壌の成り立ち、樹木の成長戦略などを指導する。	2人	①草野 ②奥野
③ 草原で遊ぼう	生徒たちが草原内で遊ぶための次のメニューを用意する。 ・目隠し冒険トレイル:目隠しして張ったロープをたどって歩く ・茅とばし:茅の葉をとばし、その距離を競う ・草原からのお便り:草原の草花などを張ったハガキを作る ・ススキ毬、茅箒作り ススキを使ったクラフト ・草原で発見:自由に草原内を歩かせ何を発見したかを発表	4~6人	①岡田 藤岡 北村 ②尾島 浅川 山田
④ 雲越家住宅	上ノ原のススキで屋根を葺いた国の重要文化財雲越家で、昔の人の暮らしと生活の知恵について指導する	2人	林 親雄 吉野一幸

■2018定例活動⑧
「茅出し・十日夜(とोकんや)・山の口終い
—自然の恵みに感謝—」 報告 草野 洋

収穫の秋、みなかみ町藤原地区の上ノ原では、10月下旬にボランティアが刈った茅ボッチと村の茅刈衆(二人)が刈ったボッチおおよそ 680 基が立って(中には倒れて)茅出しを待っていた。

刈った茅を世に出し、屋根萱として商品にするための茅出しは重労働ではあるが茅に「第二の茅生」を与えるため大切な作業である。

今年の茅出しは、11月17、18日、好天の中で9人が参加して行われた。雪の中で行うこともあるこの作業であるが、今年は雪もなく茅ボッチの乾燥も十分である。

その数、村の茅刈衆に約1か月かけて前日まで黙々とやっていただいたのが514ボッチ、茅刈合宿で74ボッチ、イベントでボランティアが刈ったのが88であるので686ボッチ(3,430束)があるはずである。

これを、ビニールひもで縛り、穂先を持って、一回に2ボッチ、乾燥が良くて軽いものは4ボッチを道路まで引き出す。



穂先をつかんで曳き出す

ボランティアが刈ったボッチは、三分の一ほどが倒れている。倒れたボッチは湿っているので一つで倍ぐらいの重さがあり、品質も悪くなる。来年は倒れないよう、ボッチの縛り方を徹底しなければならない。

上り下りを何往復もするので相当な重労働であるが、ボッチのある場所を考え、上って運ぶか、下って運ぶか判断する。もちろん下りが楽であるが、この作業をしないと茅は世に出ない。今回の参加者は、すでに何度も経験しているので要領が良い。参加者が少なかったので、



2日間で終わるか心配したが、全員奮闘の甲斐あって、1日目で約8割を搬出して、町田工業のダンプトラック1台に積み込み、送り出した。

明日までの作業の見通しがついたところで一日目の作業を修了。上ノ原から下りる途中、遊山館の前に立ち寄り、十日夜の餅つきと「藁でっぼう」づくりをいっしょにやった。(写真・右)



この夜は、陰暦10月10日の十日夜(とうかんや)。稲刈りを終わって山へと帰っていく田の神さまを送り出す民俗行事で、群馬、埼玉、山梨、長野県にかけて行われている。子供たちが家々をまわり、藁の棒をもって土をたたいて(モグラをたたく)次の年の豊穰を祈ると、子供たちにはお菓子がふるまわれる。北山さんたちが40年ぶりに復活させた伝統行事であり、日本版ハロウウィンともいえるが、渋谷でバカ騒ぎする幼稚な大人に見せたい行事である。



十日夜の子供たちは夜の時半ごろ、宿の「樹林」にやってきた。玄関前で藁でっぼうを振り下ろしながら「とうかんや とうかんや あさそばきりにゃ ひるだんご よう(ゆう)めしくっちゃ ぶったたつけ」とはやし言葉を唱える(写真・右)。終わると、青水のメンバーが持参したお菓子が子供たちにふるまわれた。



山の口終いの前日に茅出しの収穫作業にふさわしい伝統行事が体験出来た。夜空を見上げると、十日の月が雲間に見え隠れしていた。

2日目は、昨日の残りの茅出し。はかどっているので2時間程度で終わると踏んでいたが、1時間30分ほどで終了して、北山さんのキノコの種コマ打ちも手伝ふ(写真・右上)。曳きだした残りの茅ボッチは、町田社長が、腰痛をおして運転してきていただいたダンプに積み込んだ。



藤原現地事務所報告

「6年目を迎えた十日夜」

北山 郁人

11月17日(土)は旧暦の10月10日の十日夜(とおかんや)でした。藤原で数十年ぶりに十日夜の行事を復活させて、昨年で6年目になります。

藁でっぼう(つとっこ)をみんなで作り、お餅をついて、腹ごしらえ。そして、「とうかんや、とうかんや、あさそばきりにゃ、ひるだんご、ようめしくっちゃ、ぶっぱたけ!」というかけ声を練習して、いざ各家を回ります。

初めはバラバラだったかけ声も、宝台樹周辺の家を十軒ほど回るうちに、息もぴったりあって、大きな音が出るようになりました。

ちょうど今年も、森林塾の活動ともかさなり、たくさんのギャラリーにも見ていただくことができました。また、お礼に、たくさんのお菓子もいただきました。毎年続けていきたい行事です。

十日夜(とおかんや)とは、旧暦10月10日は、稲刈りが終わった後、田の神様が山に帰る日とされています。

一般的には、稲の収穫を感謝し翌年の豊穰を祈る行事で、主に関東地方で行われていました。わらで作ったわら鉄砲という筒状の棒で、地面を叩きながら、畑にいるモグラやネズミを追い払うという意味も持っています。各家々をまわり、お菓子などをもらう日本式ハロウィンで、子供たちが中心となる収穫感謝祭です。



看板を外して、全ての作業を終えてから、厳かな気持ちで「山の口終い」の神事を行った。1年間の作業が安全に終わり、立派な茅が収穫できたことを十二様に感謝した(写真・左上)。

この後、ご厚意に甘えて深津フミ子さんの畑で、大根、キャベツ、サトイモ、ヤーコンなどをたくさんいただいた。また、参加者には、林幸雄さんから新米「ゆめぴりか」をいただいた。

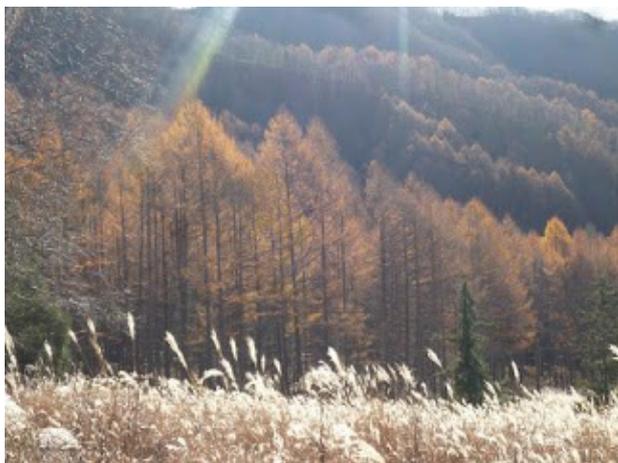


もう一つの収穫作業

今年も野焼から始まった茅場の作業は茅出しで終了、上ノ原はこの後、雪に埋もれる、今年の茅刈は古民家合宿でどうか古民家1棟分の茅束を確保できたが上ノ原のキャパシティからすると、その量は三分の一程度である。保全と活用のバランスを考えながら、来年度以降の活動を考えていきたい。



茅出しのメンバー



上ノ原の茅場とミズナラ林



リレー投稿・第一回
「団地住まい」

川端英雄

◆森林塾青水が‘おぎゃあ’の頃、茅原は背丈以上の高さのススキに負けず、タニウツギなどの樹木も縦横無尽。直径20cmくらいはある白樺などがニョキニョキ。ススキ草原再生の名のもとに、赤く可憐なタニウツギを皆伐しようとする、女性陣から‘止めてエ’の悲鳴があがる。シンボルツリーとしての数本を残して、白樺も伐る。滴る汗をぬぐいつつ刈って伐って、腰を伸ばして視線を上げれば、そこには谷川岳、朝日連峰、上州武尊が青空にクッキリ。上州武尊の噴石を掘り起こして十郎太沢の水の出口に石垣を積む。やがて地元の白い目も和らぎだして、十郎太沢に木橋をかける頃にはブルまで出での応援ぶりに感激ひとしお。

◆茅刈の経験もあって、今から10年前の我が団地(1200世帯、3400人が住む)の草ボウボウの空き地に挑戦してみようか、との気になった。

草刈りは金を払って業者がやるものとは、当時の団地内の雰囲気。管理組合、自治会とも無関心だったので、草丈は伸びるに任せて1mを優に越える。さる長老の声かけもあって、これじゃあんまりだね！と、共感する有志が集まり臭かろうではない、草刈ろうと。自分は、上ノ原で鍛えた草刈りの腕前が発揮できるかもを胸の内に、‘草ひきクラブ’を結成。

初めは10数人が集まるも、太陽に背中を焦がされて、みるみる落伍。人は入れ替わり立ち替わりして、常時草ひきに精出すは5~6人。それでも10年を経た今は、管理組合が除草機を買ってくれたり、自治会がお茶代くらいは持ってくれたりするので、気分的に楽になったものの、立ち上げ時からしばらくの間は、鎌もゴミ袋も手袋もお茶代もぜ〜んぶ自腹。あまつさえ、嫌がらせか草刈りをしているそばで、犬の立小便をさせたり、「管理費を払ってんだから、草刈は業者にやらせればいいじゃないか」などの陰口を叩かれる。そんなこんなで、転居したメンバーもいたけれど、獅子奮迅の活躍をする人もいて、除草費200万円を支払わずに済んだ年もあった。

◆そのようなご縁もあって、管理組合との関係ができてから10数年、記憶に残る人がいる。

それは2011年の東日本大震災の折の理事長。所用で新宿にいた彼は、7~8時間をかけて徒歩で帰宅、震

災翌日から陣頭指揮を開始。幸い通じていた屋上スピーカーを通して、7棟1200世帯へのボランティア募集呼びかけと班編成を行って、全棟の要救護者の全戸点検指示、管理会社との復旧機材の支援要請、途絶したインフラ対策の公共機関との折衝指示など、水際立った指揮ぶりが記憶に残る。

今ひとり、時期は隔たるがやはり理事長職。団地では珍しかろう‘理念’を掲げて就任、期待されたが、月を追って人気離散。口をきく人がほとんどいなくなってしまうようだ。聞けば、彼は業界でも有名な仕事師のようで、業務の実績がついついプライドをいやませ、職階・職位のない管理組合の中で上から目線でふるまったことに、メンバーが嫌気をさしたらしい。人柄も悪くなく、緻密なしごとぶりなのに、気の毒な人だった。私が主宰する市内のグループの講師に招いて、業界の話をしてもらったけれど、救われたような表情に、彼の心情が察せられた。

◆塾長・幹事は水も漏らさぬ計画・手配でたいへんでしょうが、薄らぼんやりの私には、嫌がらせも陰口もない、嘘も駆け引きも、妬みも奢りもない上ノ原は、なんだか性に合う。人生100年時代、まだ20有余年あるので、上ノ原さま、これからもよろしくお付き合い願います。

多様な経験と考え方と生活をしている人が、同じ地域に多く住んでいると、どうしても角が立つことが少なからず出てくる。もと上場企業の役員さんのものの言い方、高い値段で買った棟の住人は、やはり上から目線の人が少なくない。「生きていく、生きて在る」との言葉があるけれど、生きていくために立派な会社に入り、立派なマンションに住まってはいるものの、生きて在ることの勉強はこれからというのは少し寂しい。一度、上ノ原に来てもらいたいものだ、と思っている。



■野守のつづき(15)

～ 世代交代とサスティナブル・ユース ～

●へっぴり腰でも鎌を研ぎ茅を刈る！ 10月20～21日

良好なる茅場を維持するための2大イベント。それは、4月の野焼きと10月の茅刈り。茅刈り作業の始めは鎌研ぎ。指導員は地元の萬枝さんと町田工業の富沢さん。良く研げば、へっぴり腰でも作業効率は上がる！

ところで、これまでの茅刈り検定で5～6人の「茅刈り士補」が誕生していたはず。是非、指導員をお願いしたいもの。萬枝さんや富沢さんにいつまでも頼ってはいられないのだ。



●茅場にこだます子供たちの歓声

10月21日



北山塾頭が園長を務める地元保育園の児童と父兄が来遊。終日、広場周辺で戯れ、中には管理道をたどり炭窯広場まで往復する親子も。



北山家をはじめ近年、藤原に移住してきた若者ファミリーたちの子弟が目立つ。ご指導を仰いできた地元の先輩諸兄の高齢化が急速に進む中で、将来の活動の担い手として大いに期待したいもの。ところで、保育園の園長助手として雇ってもらえないものかな！

●上ノ原は「文化財を守る草原」 11月17日～18日

茅刈りも大事だが、茅出しはもっと大事。10月中に刈りとられボッチ状態(1ボッチ=5束)で空干しの後、毎年11月中旬には引き出され町田工業さんのトラックに積み込まれる(写真→右上)。



これで初めて、上ノ原の茅が世に出る準備が整うのである。きついけど、お手伝いして一番喜ばれるのもこの引き出し作業なのだ。

上ノ原の茅は、地元の諏訪神社や雲越家住宅をはじめ、中之条の富沢家住宅や四万温泉の日向見薬師堂などいずれも国指定重要伝建の茅葺屋根材として使

われてきた。つまり、上ノ原は「文化財を守る草原」なのだ。かつて、国土面積の10%余もあった草原は今や1%に。上ノ原の茅資源の希少性・重要性は増すばかり。

●筒井先生の訓えと現代版入りあい 11月20日

筒井迪夫先生の通夜に参列。「森林文化」思想のもと、今日の公益的機能重視の森林行政を導いた大先達。当塾の淵源たる現代版「入会慣行」を考える集い(2002年発足)に理論的バックボーンを与え、入会慣行こそ我が国が世界に誇るべき”Wise & Sustainable use”の模範と気づかせて下さった。これが講座「コモンズ村ふじわら」の開設を促し、やがて流域市民と地元が協働する今日の利根川流域ネットワークの形成へとつながってきたのであった。享年93歳の大往生。あらためてご冥福を祈り、御教への貫徹を誓いたい。

●平原 俊会員の博士号取得を祝う 11月28日

「自然資源管理のガバナンスにおける市民知と専門地の関係性」と題する博士論文。東京農工大で学位取得の朗報！当塾創設以来、在席した会員は優に100人を超えるが、博士誕生は初めてのこと。

上ノ原の茅場をめぐる藤原集落の入会慣行に注目、当塾が展開してきた現代版「入会慣行」づくりを持続的自然資源管理の成功事例として紹介して下さっている。



数次にわたり現地を案内し、地元先輩衆との面談・ヒアリングに立ち会った者として嬉しい限り。地元の皆さま方にも是非報告してもらい、共に喜びを分かちあいたいもの。

わが頬にふれてあたたか枯れ芒 青邨
前号で、秋の句として鬼貫の「面白さ急には見えぬすすきかな」を揚げた。こちらは青邨。冬枯れの季節になれば、こんな楽しみ方もあるというのか。

平成30年師走(青)

～編集後記～

『茅風通信』第56号をお届けします。

昨年秋の青水の活動は赤谷プロジェクトの視察から始まりました。里山の雰囲気ただよう上ノ原とは異なる奥利根の山々の奥深さを感じました。

10、11月は茅刈りから茅出しと、茅の収穫が活動の中心です。トラックに積むまでは人力に頼るしかありませんが、いい茅を安定的に供給できるよう、工夫を重ねつつ進んでいきたいと思えます。

また、本会会員の平原俊さんが、奥利根に通いながら考察を深めた学位論文により、博士号を取得しました(野守のつづやき参照)。

今号から新コーナー「リレー投稿」を始めました。皆様からのご寄稿をお待ちしています。(稲)